
仮面ライダー×仮面ライダー デュライド&幽汽 MOVIE大戦PAST

仮面ライダー大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー ディライド&幽汽 MOVIE大戦PAST

【Nコード】

N3287Y

【作者名】

仮面ライダー大好き

【あらすじ】

【仮面ライダー幽汽 時の牢獄】

囚われた電王とゼロノスを救うべく幽汽とNEW電王の新たな戦いが始まる。

【仮面ライダーディライド 過去編】

蘇る過去、現れるかつての宿敵。今明かされるディライドの悲しき過去。

【MOVIE大戦PAST】

二つの物語が交差する時最大のMOVIE大戦が始まる！

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“前編” (前書き)

時系列は最初のシーンはネオ電王の世界を去ってすぐ、そして現在という感じです。

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“前編”

倉石ユウキ／仮面ライダー幽汽。

かつて近藤渚／仮面ライダーディライドと共に世界を巡っていた仮面ライダー。だがその正体は野上良太郎の世界で生と死をひっくり返そうとした死郎の子孫だった。

だが彼は渚と出会い、様々な世界を巡り真の仮面ライダーとなった。そして自身の世界を救うべく渚達と別れ、自分の世界へと帰還していった。

そしてこの物語は彼の新たなる戦いの話である……………。

「ソラ、ただいま……………」

ユウキは今は亡き婚約者、神田ソラの墓前に立っていた。
ユウキは墓に花を供え、これまでの旅の事を話していた。

「つてな訳で色々あって、ここに帰って来たって訳だ」

一通り話し終えると一人の青年がユウキに近付く。

「ん？ユウキじゃないか。帰って来たのか？」

「シュウイチか……………」

北川シュウイチ／仮面ライダーゾルダ。

ユウキと共に戦っていた仮面ライダー。

「どうかしたのか？」

シュウイチはユウキが帰って来た事に疑問を抱く。

「さあな、俺にも良くわかんねえ。ただこの世界で何かが起きようとしているって事は確かなんだ。何か変わった事は？」

「いや、何も………」

ユウキとシュウイチがそんなやり取りをしていると、

―ドガアアアン！―

「「！？」」

突如街の方で爆発が起きる。

「おいおいマジかよ！」

シュウイチはこの事態に驚きを隠せない。

「シュウイチ、行こう！」 「あ、ああ！」

ユウキがそう言うのとシュウイチは戸惑いながらも現場へ急行する。

二人が現場に到着すると、ライノスイマジンとクラークンイマジンが人々を襲っていた。

「シュウイチ、行くぞ!」「ああ、久し振りにな!」

二人はそう言うのと変身準備を完了させる。

「「変身!」」

《スカルフォーム!》

ユウキは漆黒のボディを持ち、デンカメンにドクロが付いている仮面ライダー幽汽・スカルフォームに変身する。

一方シュウイチはミラーモンスターのマグナギガと契約した牛を模した緑のライダー、仮面ライダーゾルダに変身する。

幽汽SFはサヴェジガッシャーをソードモードに組み立て、ゾルダは銃型の召喚機・マグナバイザーを構え二体のイマジンに走り出す。幽汽SFはライノスを、ゾルダはクラーケンを相手に選り戦闘を開始する。

先ずはゾルダVSクラーケンの戦いだ。

ゾルダとクラーケンは互いに銃を使った遠距離戦を繰り広げる。

互いに一歩も退かない銃撃戦。

だがやはりゾルダの方が腕が上なのか少しずつ押し始める。

そして遂にゾルダの放った弾丸がクラーケンにヒットする。

「ぐあああ!」

ゾルダはその隙にカードデッキからアドベントカードを一枚取り出しマグナバイザーに装填する。

《シュートベント!》

するとゾルダの手に巨大な大砲・ギガランチャーが装備される。そして狙いを定めクラーケンにギガランチャーを放つ。

「喰らえ！」

放たれたギガランチャーは見事にクラーケンに直撃し、クラーケンは盛大に爆発した。

「ぐあああ！」

次は幽汽SFVライノスの戦いだ。

二人は剣と棍棒による接近戦を繰り広げる。

だがライノスの体は硬く、中々攻撃が決まらない。

さらにライノスの重たい一撃が幽汽SFにダメージを与えていく。

「中々やるな、サイ野郎！だがどんな敵にも弱点は必ずある！」

幽汽SFはそう言うときサヴェジガッシャー・ソードモードでライノスの比較的装甲の薄い箇所を的確に突いていく。

そしてある程度弱った所で、

「今なら行ける！」

そう言ってライダーパスを取り出しユウキベルトにセタッチする。

《フルチャージ！》

サヴェジガッシャー・ソードモードはオーラを纏う。そしてそれを振り下ろし地面に叩き付け衝撃波を放つ【ターミネイトフラッシュ・スカル】を放つ。

「はあああ！」

「があああ！」

【ターミネイトフラッシュ・スカル】を受けたライノスはダメージに耐えきれず爆発する。

幽汽SFとゾルダは変身を解く。

シュウイチはユウキにこう聞いた。

「本当みたいだな、この世界に新たな危機ってのは……………」

「ああ。でもやるしかない。俺達しか居ないんだから……………」

ユウキはそう言う空を見上げる。

その空にはどす黒い雨雲が広がっていた……………。

【仮面ライダー幽汽 時の牢獄】

―二ヶ月後―

何処かの夜のオフィス街。二人の仮面の戦士が灰色の異形と戦っていた。

「なんだこいつ！めっちゃくちゃ強いじゃねえか！」

『気を付けて、モモタロス！』

そう言った仮面の戦士の一人は、桃を模した仮面を持つ赤き戦士、仮面ライダー電王・ソードフォーム。

モモタロスというのは電王こと野上良太郎に協力するイマジンの一体である。

電王SFはデンガッシャー・ソードモードで灰色の異形を切り裂くが全く通じず灰色の異形の持つ巨大な鎌で切り裂かれる。

「ぐああああ！」

『モモタロス！』

するとそこへもう一人の仮面の戦士が灰色の異形と取っ組み合う。

「大丈夫か！？野上！」

『侑斗！』

そう言ったもう一人の仮面の戦士は牛を模した仮面を持つ緑の戦士、仮面ライダーゼロノス・アルタイルフォーム。

ゼロノスとは良太郎の姉である野上愛梨の婚約者、桜井侑斗の過去である青年期の桜井侑斗が変身する仮面ライダーだ。

灰色の異形はゼロノスAFを払い除け、鎌で切り裂く。

「うわあああ！」

ゼロノスAFは電王SFの所まで飛ばされる。

「大丈夫か！？」

「ああ…。だがこいつ、あの時より確実に強くなってやがる……………」

！」

「ちい！あの時の様には行かねえってか！」

そう、今彼等が戦っているのはかつて倒した筈のイマジン、デスイマジンだった。

電王SFとゼロノスAFは何とか立ち上がり再びデスに立ち向かうとした瞬間、

「はあ！」

今度は青い仮面の戦士がデスに斬りかかる。

『幸太郎！』

「じいちゃん、助けに来たぜ！」

この青い仮面の戦士は仮面ライダーNEW電王・ストライクフォーム。

そして彼の使う剣は相棒のイマジンであるディが変身したマチェーディである。

そして何故NEW電王SFが電王SFを祖父と呼んだのか。それはNEW電王に変身する青年、野上幸太郎は未来から来た良太郎の孫だからである。

電王SFとゼロノスAFはNEW電王SFがデスと戦っている隙に、

『モモタロス、みんな行くよ！』

電王SFはそう言うのと赤色の携帯電話、ケータロスを取り出す。そしてケータロスのボタンを四つ押し通話ボタンを押す。

《モモ！ウラ！キン！リュウ！》

そしてケータロスの側面に付いてあるボタンを押す。

《クライマックスフォーム!》

電王SFは良太郎に協力するイマジン、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス全てを憑依させ、ソードフォーム、ロッドフォーム、アックスフォーム、ガンフォームのデンカメンを全てを身に纏った強化形態、仮面ライダー電王・クライマックスフォームに変身する。

「じゃあ! 行くぜ!」

電王CFはデンガッシャー・ソードモードを構えデスに向かって走り出す。

そしてゼロノスAFもゼロノスベルトからカードを抜き取り、

「デネブ、来い!」

そう言うゼロノスAFの背後に侑斗に協力するイマジン、デネブが現れゼロノスAFはカードを緑の面から黄色の面に裏返し再びゼロノスベルトに装填する。

《ベガフォーム!》

ゼロノスAFはデネブを憑依させ、ドリルを模した仮面、胸にデネブの顔を出現させた仮面ライダーゼロノス・ベガフォームに変身する。

「最初に言っておく、胸の顔は飾りだ!」

『馬鹿っ! んなこと言ってねえで行け!』

「わかった！」

ゼロノスVFのずれた発言に突っ込みを入れる侑斗。

突っ込まれたゼロノスVFはゼロガッシャーをサーベルモードに組み立て電王CFとNEW電王SFに加勢する。

だがデスは圧倒的な強さを見せ三人のライダーを幾度なく切り裂く。

「かなりやべえぞ！どうする！？」

モモタロスがそう言った瞬間上空からデンライナーが現れる。

「一旦退こう！」

NEW電王SFがそう言うのとデンライナーは電王CF達とデスの間を走り電王達を回収した。

ただし回収したのはNEW電王SFだけだが。

「幸太郎、あとは頼むぜ！」

「本気で行くぞ！」

モモタロス達はあとの事をNEW電王SFに任せデスに立ち向かった。

―デンライナー・食堂車―

「どういうことだよ！」

幸太郎はオーナーに激怒して、今にも殴りかかりそうな勢いでオーナーに突っ掛かる。

「幸太郎、落ち着くんだ」

それをテディが冷静なだめる。

コハナとナオミはそれを心配そうに見守る。

オーナーは怒る幸太郎に対し冷静にこう言う。

「今のままじゃ勝てません」

「だったら尚更じいちゃん達ほっとけないだろ！」

幸太郎はそう言うがオーナーは、

「良太郎君達は囿です。彼等もそれを理解しています」

オーナーの言葉に幸太郎は、

「囿って？」

「彼等がイマジンを止めている間に幸太郎にはある人物の下へ向かって下さい」「ある人物？誰だよ」

「行けばわかります」

オーナーがそう言うのとデンライナーは速度を上げ走り出す。

―数日後―

「はああああ！」

幽汽SFとゾルダは今日も現れるイマジン達を倒していた。

「最近活発になり始めたな、イマジンの奴等」

「確かに。そろそろマジで気合い入れねえとな」

幽汽SFとゾルダはそんな事を言いながら変身を解く。その時だった、上空から電車のレールが現れ、突如としてデンライナーが現れる。

「デンライナー？」

デンライナーは地上に降りユウキとシュウイチの前に停まる。

そこから一人の青年とイマジンが降りてくる。

青年とイマジンユウキ達に近付く。

「何だ、あんた」

ユウキは青年とイマジンにそう聞く。

だが青年とイマジンは全く別の事を言う。

「あんたが死郎の子孫、倉石ユウキか？」

「何でそれを？　ってかあんた誰だよ」

ユウキがそう聞くと、

「野上、幸太郎」

「相棒のテディだ」

その名前を聞いたユウキは暫く考え込むとハツとした表情をして、

「あ、先祖を倒した電王か！」

ユウキは手をポンと叩きながら言う。

「何だ、先祖の事わかるのか？」

「ああ、大体な」

ユウキがそう言うのと幸太郎は、

「なら話は早い。ユウキ、あんたに頼みがある」

「頼み？」

「ああ。じいちゃん達とゼロノスがイマジンに捕まった」

「なに！？」

ユウキはその事に驚きを隠せない。

「そんでじいちゃん達は今時の牢獄って所に捕まってる」

「時の牢獄？」

ユウキは聞き慣れない単語に首を傾げる。

「何でもそこにはあんたの協力無しには行けないみたいなんだ。だから俺達はあるの所に来たって訳」

「何で俺なんだ？」

ユウキがそう聞くと今度はテディが口を開く。

「ユウキ、幽霊列車は使えるか？」

「え？使えるけど……」 「時の牢獄に行くには幽霊列車が必要不可欠なんだ」 「なるほど」

ユウキはそう言うのと暫く考え込む。
そして、

「でも、俺にはやる事が……」

ユウキは戸惑うがそこへシュウイチが口を開く。

「行ってこい、ユウキ。お前が帰ってくるまで、俺がこの世界を守る」

シュウイチがそう言うのとユウキは力強く頷き、

「幸太郎、テディ、行こう！時の牢獄へ！」

ユウキはそう言うのと幸太郎達と共にデンライナーへ乗り込む。
デンライナーはユウキ達を乗せると空に向かって走り出した。

―デンライナー・食堂車―

「はい、コーヒーどうぞ！」

椅子に座ったユウキにコーヒーを差し出したのはデンライナーの客室乗務員のナオミ。

ユウキはナオミのコーヒーを見て、

「なに、これ……………」

ユウキは一瞬戸惑うも、カップを手に取りコーヒーを飲もうとする。それを見たコハナは、

「あ、ちょっと！」

飲むのを止めようとするが時既に遅し。

ユウキはコーヒーを口に含む。

その瞬間、

「ぐえっ!？」

人間には恐ろしく不味いコーヒーを飲んだユウキはコーヒーを盛大に吹き出す。

「なんじゃこりゃ……………!」

ユウキは顔を真っ青にして言う。

そして少し間を開けて静かにこう呟いた。

「信次郎さんのコーヒーが、懐かしい……………」

幸太郎はそんなユウキを見て苦笑いし、オーナーの下へ行く。

「それでオーナー、時の牢獄ってのはどこにあるんだ？」

幸太郎の問いにオーナーはチャーハンを食べながら、

「わかりません」

「は？」

オーナーの言葉にその場に居る全員が頭にはてなを浮かべる。

「ど、どういことだよ？」

幸太郎は慌ててオーナーに問い詰める。

「時の牢獄とはいつどこに現れるかわかりません。ですからターミナルに行き、駅長に頼もうと思ひまして」

「な、なるほど……」

幸太郎はとりあえず納得する。

そしてオーナーはチャーハンを口に運びながら、

「もうすぐ着く筈ですよ」

オーナーがそう言うのとデンライナーの前に巨大なターミナル、キングライナーが現れる。

「あれがターミナルか……」

ユウキは初めて見るターミナルを見て少しはがり感心していた。

―ターミナル―

デンライナーはターミナルに到着すると停車する。

ユウキ達はデンライナーを降りるとオーナーが、

「暫くターミナルで時間を潰していて下さい。駅長の所へ行ってくるので」

オーナーはそう言うと言き出す。

「じゃあ俺達も適当にぶらぶらするか」

幸太郎がそう言うと言き出す。

ユウキは今待合室に居た。ターミナルの汽笛が鳴ると同時に周りの景色が変わる。

それを見たユウキは、

「なんだこれ……、どうなってんだ？」

「凄いでしょ？」

そう言ってユウキの下に歩いて来たのはコハナだった。

「あんた確か、コハナだっけ？」

「ハナで良いよ？」

「そっか、じゃあハナ、このターミナルってのはどうなってんだ？」

ユウキの問いにハナは少し考え、

「さあ、私もよくわからないの。ただ言えるのは、ここは時間の中
って事」

「時間の中か……。俺も幽霊列車に乗ってたけど時間の中を旅し
た事は無かったな……」

ユウキは少し黙ると再び口を開く。

「なあ、ハナ。これから助けに行く奴等ってどんな奴等なんだ？」

「そうね……。じゃあまずは良太郎から。野上良太郎、電王に変
身する男の子なんだけど、凄く気が小さくて運が悪いんだけど、誰
よりも優しくて、誰よりも強い」

「なんかすげえ奴なんだな……」

ハナはさらに続ける。

「次は良太郎に協力するイマジン。まず赤鬼のモモタロス、こいつ
はただの喧嘩馬鹿。亀のウラタロス、こいつは正に女の敵ね。熊の
キンタロス、いつも寝てばっかだけど頼りになる奴。龍のリユウタ
ロス、まだまだ子どもでしょっちゅうモモタロス怒らせてる」

「なんか、すげえ賑やかそうだな」

ユウキは良太郎達の話聞きなんだか懐かしそうな表情をした。

「あいつ等、どうしてるかな……」

ユウキの言うあいつ等、それは恐らく渚達の事だろう。

「あいつ等？」

ハナがそう聞くとユウキはハツとして、

「あ、いや何でもない。それでゼロノスはどんな？」「桜井侑斗、わがままで自分勝手だけど自分の意志はしっかり持っているって感じ。そして侑斗に協力するイマジンのデネブ、本当に面倒見が良くて侑斗のお母さんって感じ。侑斗の事を誰よりも気にかけてる」
「そっかあ」

ユウキとハナがそんな話を話していると、

「おい、ユウキ！」

「ん？」

ユウキは声のする方に振り向く。
すると幸太郎がこちらに走ってきて、

「時の牢獄の場所がわかった！」

「まじか！」

今ユウキ達はターミナルのプラットホームに居た。

「なるほど、わかった」

ユウキはオーナーから時の牢獄の場所を聞いた。

するとテディが、

「じゃあユウキ、幽霊列車を」

「ああ」

テディがそう促すとユウキはライダーパスを取り出す。
するとどこからともなく幽霊列車が現れユウキ達の前で停車する。

「じゃあ幸太郎、テディ、ハナ、行くか！時の牢獄に！」

ユウキがそう言うとき幸太郎達は幽霊列車に乗り込む。

――幽霊列車内――

ユウキは幽霊列車を運転する為、変身の準備を完了させる。

「変身」

《スカルフォーム！》

ユウキは幽汽SFに変身すると運転席に行きマシンデスバードに跨がりライダーパスをセットする。

「飛ばすからしっかり捕まっとけよ！」

幽汽SFがそう言うとき幽霊列車はゆっくり動き出し、時の牢獄へ向かって走り出した。

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“前編”（後書き）

次で幽汽編は終了です。

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“後編” (前書き)

漸く出来ました。
では、どうぞ！

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“後編”

幽霊列車に乗り込み時の牢獄を目指す幸太郎達。

「あ、そう言えばオーナーが幽霊列車に乗る前にこんな事を……………」

突然デディが思い出した様にそう言う。

“それと、もう一人助っ人を呼んでありますから”

「誰だろう？」

幸太郎達はそんな事を言いながら幽霊列車の客室に入っていく。

客室に入った瞬間三人は啞然とした。

その理由は、

「遅いぞ、家臣達よ」

白い羽を撒き散らし幽霊列車の客室に優雅に座るジーク。

「助っ人ってこいつ!？」

幸太郎は呆れながらそう言った。

だがジークはそんな事を気にせずハナの下へ行き、

「姫、相変わらず美しい……………」

そう言ってハナの手を取りキスをしようとする。
だが、

「何であんたがここに居んのよ！ふんっ！」
「ぐぼっ！？」

ハナの鉄拳がジークの顔面にヒットする。

「はぁ……………」

テディはその様子を呆れながら見ていた。

その頃、時の牢獄では……………。

「だぁー！何なんだよここ！」

「ちよつと先輩静かにしててよ！」

「騒いでもしやあないやろ！」

「モモタロスのバーカバーカ！」

「お、落ち着いて！」

上からモモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、デネブの台詞。

今モモタロス達は特殊な檻で出来た牢屋に捕らえられていた。

「落ち着いてられるかよ！幸太郎、早く来てくれえ！」

「「「はぁ……………」」」」

モモタロスは雄叫びを上げ、ウラタロス達は呆れていた。

その様子を別の牢獄に捕らえられている良太郎と侑斗は、

「モモタロス……………」

「野上、何とかなんねえのか……………」

ウラタロス達同様呆れていた。

良太郎は気を取り直して、

「幸太郎を待つしかないよ……………」

「確かに、今頼れるのはあいつしかいねえしな」

「うん、頼むよ幸太郎……………」

良太郎は静かにそう呟いた。

そしてその間もモモタロスは何かを叫んでいたが、良太郎と侑斗は遠い目をして聞き流したそうなの……………。

その頃幸太郎達は、

「にしても、まさか幽霊列車に乗るとは思ってもみなかったな……………」

「確かに……………」

「あの時は敵だったからね……………」

「中々良い乗り心地だ……………」

最後の一人の言葉は無視して、幸太郎達は幽霊列車事件の時の事を思い出していた。

まさか幽霊列車に乗る事等考えもしなかった。

無理もない、やり方を間違えたにしてもあの時は完全に敵だった死郎が所持している物なのだから。

「でも、先祖と子孫であんなに変わるもんか？」

「元からの性格なのか、それとも彼を変える様な出会いや出来事があったのか……」

幸太郎とテディがユウキについて話しているなか、

「そんなの関係ないじゃない、過去がどうであろうと、何があったとしても、ユウキはユウキよ」

唯一コハナだけがユウキの過去等全く気にしてなかった。

おそらくユウキが良太郎達の話聞いた時、どこか懐かしい表情を浮かべていたからだろう。

幸太郎達がそんな事を話していると、

「見えたぞ！あれが時の牢獄だ！」

列車の車内アナウンスを通じて幽汽SFが幸太郎達にそう報告する。

それを聞いた幸太郎は窓から覗き込む。

すると時の砂漠の一部が黒く歪んでいた。

「一気に行くぜ！掴まってるよ！」

幽汽SFはそう言うのと幽霊列車を時の牢獄へと走らせる。

その頃時の牢獄のある場所では、

「来たか……………！」

デスイマジンはその呟くと、

「ふん！」

自身の肉体から砂を撒き散らし、大量のイマジンを造り出す。

「行け！」

デスのその言葉を合図にイマジン達は一斉に走り出す。
邪魔者を消す為に。

幽汽SFは幽霊列車を時の牢獄へと進入させ、時の牢獄へと降り立つ。

「ここが時の牢獄……………」

辿り着いた時の牢獄は暗い洞窟の様だった。

そして少し遅れて既にNEW電王・ストライクフォームに変身した幸太郎とマチェーディとコハナとジークが幽霊列車から降りる。

「ここにじいちゃん達が……」

NEW電王SFがそう言った瞬間、彼等の前にデスの造り出した再生イマジン軍団が立ちはだかる。

幽汽SFとNEW電王SFはそれぞれ武器を構える。

「幸太郎、どうする？」

「こいつらを倒しつつじいちゃん達を探す！」

「了解！」

二人のライダーはそう言うのと敵軍へと突っ込む。

二人のライダーは圧倒的な強さで次々とイマジン達を蹴散らしていく。

コハナとジークはその後ろを着いていく。

その戦闘により起こる爆発の音はモモタロス達の居る牢獄まで聞こえていた。

「ん！？まさか幸太郎達か！？」

モモタロス達に希望が見え始めた。

そしてモモタロスは力一杯叫ぶ。

「こおーたろおー！」

その声は時の牢獄内に響きわたる。

「この声、モモタロスだ！」

「幸太郎、どっちだ！？」「たぶん、こっちだ！」

幽汽SFとNEW電王SFはモモタロスの声を頼りに牢獄内を進んでいく。

そして、

「ユウキ、こっちだ！」

NEW電王SFが良太郎達の捕らえられている牢獄への道を見付ける。

「幸太郎、行こう！」

幽汽SFとNEW電王SFはモモタロス達の救出を試みるが、イマジン軍団に阻まれ中々前に進めない。

「くっ！これじゃあ！」

幽汽SFが悪態をついているとNEW電王SFが、

「ユウキ！行ってくれ！」

そう言いながら【カウンタースラッシュ】を放つ。

「幸太郎！でも！」

「いいからっ！行けっ！」「……………わかった！」

幽汽SFはそう言う走り出す。

そして通路の一番奥に辿り着くと、そこには二つの牢獄があり、一つは良太郎と侑斗が捕らえられており、もう一つにはモモタロス達イマジンが捕らえられていた。

幽汽SFは良太郎と侑斗の居る牢獄に近付き、

「あんたが野上良太郎か!？」

「えっ? う、うん………」

良太郎は幽汽SFの問いに戸惑いながらも返事をする。幽汽SFは次にモモタロス達イマジンが捕らえられている牢獄に近づく。

「あんたらが野上良太郎に協力するイマジンだな？」

幽汽SFはそう聞くもモモタロスは全く違う事を言い出した。

「てめえ! 幽霊野郎!」

「はっ!？」

モモタロスのいきなりの言葉に幽汽SFは困惑するしかなかった。

「みんな気を付けろ! 罠だ!」

「やばいじゃ〜ん!」

「ちよっと先輩! まだ敵かどうかかわからないでしょ!？」

「本間や! とりあえず今はここから出る事や!」

「そうだ! 落ち着くんだモモタロス!」

牢獄内でガヤガヤしているモモタロス達を見て幽汽SFはただただ見ているだけだった。

だがその時、

「後ろ!」

「えっ!？」

良太郎が叫び幽汽SFが振り返る。

だが時既に遅し。

突如として現れたレオイマジンの一撃が幽汽SFに直撃する。

「ふん！」

「があっ！」

幽汽SFは壁に叩き付けられる。

レオはそこから追撃しようとするが、幽汽SFは直ぐ様体勢を立て直し反撃する。激しい攻防が続く中、幽汽SFはその中で一瞬の隙を見付けライダーパスをユウキベルトにセタッチする。

《ハイジャックフォーム！》

幽汽SFはハイジャックフォームにフォームチェンジすると、サヴェジガッシャー・ソードモードをネオソードモードに組み直し一気に反撃する。

圧倒的な強さでレオを幾度となく切り裂くと、再びパスをセタッチする。

《フルチャージ！》

フルチャージをした事でサヴェジガッシャー・ネオソードモードは巨大なエネルギーブレードを形勢する。

「喰らえっ！はあああ！」

サヴェジガッシャー・ネオソードモードを一気に振り下ろし【ターミネイトフラッシュ・ハイジャック】を発動する。

「ぐああああ！」

幽汽HFはレオを倒すと、牢獄を切り裂き良太郎達を救出する。

「ありがとう、助かったよ！」

良太郎は幽汽HFにそう言う。
だがその瞬間、

「うわあああ！」

「幸太郎!？」

NEW電王SFの叫び声が聞こえてきた。

「行こう！」

幽汽HFがそう言うのと全員は通路を駆け抜け広場に出る。

すると出たと同時にNEW電王SFがデスの一撃によってこちらに
吹っ飛んできて幸太郎とテディに戻ってしまう。

「幸太郎！」

「天井！」

良太郎達は幸太郎とテディに駆け寄る。

「大丈夫!？」

「じいちゃん……………」

「なら俺が！」

幽汽HFはそう言うのとデスに向かって走り出す。

だがデスは鎌による攻撃で幽汽HFを一切寄せ付けない。

「あの野郎、何で俺達を助けるんだ？」

モモタロスは疑問を抱いていた。

何故幽汽HFが敵の筈の自分達を助けるのかを。

それはコハナが説明する。

「モモ、彼は死郎なんかじゃないのよ」

「なに！？」

コハナの言葉に幸太郎、テディ、ジーク以外の全員が疑問の声を上げた。

「彼は死郎の子孫、ユウキ。死郎と違ってユウキは人々の為に戦ってるの」

「……………」

コハナがそう言った瞬間、幽汽HFがデスの一撃で大きく吹っ飛ばされてしまう。

「ぐああ！」

それを見た良太郎は、

「あ！モモタロス！」

そう言ってデンオウベルトを取り出す。
だが、

「ません！」

デスはそう言うのと鎌を振るい良太郎達に攻撃する。

「っ！危ない！」

幽汽HFはそう言うで一気に駆け出し彼等の前に立ちデスの一撃を諸に受ける。

「ぐああああ！」

幽汽HFは変身が解けその場に倒れる。

「ユウキ！」

「お前………」

幸太郎達はユウキに駆け寄る。

モモタロスは複雑な声を漏らす。
するとデスが、

「貴様等がどれだけ足掻こうと、この俺には勝てん」

デスはそう言うのと自身の肉体から砂を撒き散らし再び再生イマジン軍団を造り出す。

そして更にこう続ける。

「それに貴様等、そいつはあの死郎の末裔だ。もしかすれば、貴様等を裏切るかもしれんぞ？」

デスの言葉に反論したのは、モモタロスだった。

「はっ！誰の事言ってるんだ？」
「何？」

モモタロスがごくわずかな時間でユウキに対し導き出した答え、それは、

「こいつが誰の子孫だろうが関係ねえ！こいつはこいつだ、そうだろう？ユウキ」「モモタロス……」

ユウキが立ち上がるとモモタロスは彼の胸を軽く叩く。
そして、

「ああ！」

ユウキは力強く返事をする。
そしてデスに向き合い、

「俺が誰の子孫だろうと関係ない！人からどう言われようが知ったこっちゃねえ！俺がする事はただ一つ、誰も悲しまない世界をつくることだ！」

それを聞いたデスはこう聞く。

「貴様、何者だ！」

そう聞かれたユウキはニヤリと笑い、

「使わせてもらうぜ、渚……。通りすがりの仮面ライダーだ！地獄に行っても覚えてろ！」

ユウキはそう言うで一歩前に出る。

それに続き幸太郎、良太郎、侑斗も前に出る。

そして四人はそれぞれベルトを取り出す。

「じゃあ！良太郎、行くぜ！」

モモタロスはその意気込むも良太郎は、

「待つてモモタロス。ここは、行くよジーク！」

「なにい!？」

横で驚愕するモモタロスを見無視して良太郎はウイングフォーム専用のデンオウベルトを取り出す。

そしてそれに続きユウキと幸太郎と侑斗も自身のベルトを取り出し変身準備を完了させる。

そして、

「「「変身!!!!!!」」」

《《スカルフォーム!》》

《《ストライクフォーム!》》 《《ウイングフォーム!》》

《《アルタイルフォーム!》》

ユウキは幽汽SFに、幸太郎はNEW電王SFに、良太郎は仮面ライダー電王・ウイングフォームに、侑斗は仮面ライダーゼロス・アルタイルフォームに変身する。

「降臨、満を持して……………」

「最初に言うておく、俺はかーなーり、強い！」

電王WFとゼロノスAFが決め台詞を言うと同時に仮面ライダー達はそれぞれの武器を構え再生イマジン軍団に向かって走り出す。そして再生イマジン軍団もそれを迎え撃つべく走り出す。

「俺達も行くぜ！」

「「「おう！！！！！！」」」」

モモタロス達イマジンもそれに続き武器を構え走り出す。

ライダー達は自身の武器を巧みに扱い次々とイマジンを倒していく。

「さあ、どんどん行くぞ！」

幽汽SFはそう言うのとパスをセタタッチする。

《ハイジャックフォーム！》

幽汽SFはハイジャックフォームにフォームチェンジすると、再びパスをセタタッチする。

《フルチャージ！》

「でやあああ！」

幽汽HFは巨大なエネルギーブレードを形成し【ターミネイトフラッシュ・ハイジャック】を円を描く様に発動し周りのイマジンを一掃する。

そしてNEW電王SFもパスをセタタッチして右足を赤く輝かせる。

《フルチャージ！》

そして一気に飛び上がり【ストライクスパート】を放ちイマジンを一掃する。

一気に蹴散らす。

「はあああ！」

電王WFはデンガッシャーをブーメランモードとハンドアックスモードに組み立て二刀流でイマジンを次々と切り裂く。

そしてデンガッシャー・ブーメランモードを敵に向かって放り投げ、その間にパスをセタツチする。

《フルチャージ！》

そしてデンガッシャー・ブーメランモードをキャッチして、

「我が刃の前にひれ伏せ！」

そう言って二つの刃をイマジンに向かって放り投げ敵を切り裂く【ロイヤルスマッシュ】を発動する。

二つの刃は見事にイマジン軍団を一掃した。

ゼロノスAFはゼロガッシャーをボウガンモードに組み立て遠距離戦を展開する。そしてゼロノスベルトのボタンを押し、

《フルチャージ！》

フルチャージを行いカードをゼロガッシャー・ボウガンモードに装填してエネルギーをチャージする。

そしてイマジン軍団に目掛け【グランドストライク】を放つ。

「はあああ！」

ゼロノスの必殺の一撃はイマジン軍団を一掃した。

そして残ったデスに幽汽HFはサヴェジガッシャー・ネオソードモ
ードの剣先を向け、

「あとはお前だけだ！行くぞ！」

幽汽HFがそう言うのと四人のライダーはデスに向かって走り出す。
だが、

「小賢しい！」

デスはそう言うのと鎌を振るって強力な衝撃波を放ちライダー達を吹
き飛ばす。

「「「うわあああ！！！！」」」

だがライダー達はそれに怯む事なく再び立ち上がり駆け出す。

「しつこい奴等だ」

デスは呆れた様に呟くと再び鎌を振るいライダー達を吹き飛ばす。

「「「ぐああああ！！！！」」」

デスの圧倒的な強さに成す術の無いライダー達。

このまま負けるのか、幽汽HFがそう思った瞬間、

『こうなったら………！！』

良太郎がそう言うのと電王WFは立ち上がり、

『みんな！一緒にやるよ！』

「漸く出番か！待ちくたびれたぜ！」

「じゃあ行きますか！」

「よっしゃ！やったるで！」

「てんこ盛り！」

良太郎がそう言うのと四人のイメージは走り出し四人同時に電王W Fに憑依する。

そして電王はクライマックスフォームの背中にウイングフォームのデンカメンが追加された電王・超クライマックスフォームへと強化変身する。

「やっぱこれきもちわりいんだよな」

「狭いしね……」

「くまちゃんもうちょっとそっちいてよ！」

「狭いからしゃあないやろ！」

「家臣共、苦しゅうない」『そんな事言っていないで、行くよ！』

モモタロス達は文句を垂れるが、良太郎の一言でデスに向き直る。

「デネブ、来い！」

ゼロノスA Fはそう言うのとカードを裏返し再びベルトに装填する。

《ベガフォーム！》

ゼロノスA Fはデネブを憑依させたゼロノス・ベガフォームにフォームチェンジする。

「最初に言っておく、胸の顔は飾りだ！」

『馬鹿！んな事言ってる場合か！』

ゼロノスVFのずれた台詞に侑斗が突っ込む。
そして、

「よし、俺も！」

幽汽HFがそう言うのとベルトのバツクルが赤く輝く。
そしてパスをセタッチする。

《タイラントフォーム！》

幽汽HFは黒の部分を真紅の赤になり、銀の部分が黄金に輝き、デ
ンカメンも赤になった幽汽の最強形態・タイラントフォームへと強
化変身する。

「一気に決める！」

幽汽TFがそう言うのと、ライダー達は一斉に必殺技の体制に入る。

《《フルチャージ！！！！》》
《チャージアンドアップ！》

NEW電王SFとゼロノスVFは走り出し【カウンタースラッシュ】
と【スプレッドエンド】を放つ。

「はあああ！！！」

「ぐおおお！」

そして幽汽TFと電王SCFは飛び上がり、右足と左足を突きだし

【タイラントデンライダーキック】と【超ボイスターズキック】を放つ。

「「「「「でやあああ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

「ぐああああ!」

四大ライダーの必殺技を受けたデスは耐えきれず遂に爆発した。

「よし!」

ライダー達は安堵の表情を見せる。
だがその時、

「ご苦労さん、ライダー共!」

「なんだ!?!」

ライダー達は声の主を見る。

声の主は灰色のスーツを着た青年だった。

その青年はデスだった砂の中からあるモノを拾い上げる。

「これこれ」

青年はウキウキしながらそれを拾う。

「それは!」

青年が拾ったモノ、それは、

「電王のベルトだと!?!」

青年はベルトを拾い上げるところ言う。

「お前等は俺に利用されてたんだよね」

「なに!？」

「俺はデスイマジンを利用してお前等ライダーを誘きだし、その力をデスイマジンにぶつけさす事でこいつの体からこれを造り出したってわけだ」

そう、何もかもこの青年の思惑通りだったのだ。

「んじゃま、俺はこの辺で」

青年はそう言うのと次元の壁を出現させ、姿を消した。

「なっ! 待て!」

幽汽TFは追い掛けるも青年は既に居なかった。

「一体、何が……」

ライダー達はただその場に立ち竦んだままだった。
そしてあの青年の目的とは一体……? ?

仮面ライダー幽汽 時の牢獄“後編” (後書き)

次回からはデイドライド編！

仮面ライダーディライド 過去編“前編”（前書き）

それでは、ディライド編どうぞ！

仮面ライダーディライド 過去編“前編”

—岬写真館—

「げっ！ここでジョーカーかよ……………」

そう言ったのは渚だった。

「スピードの3さつき使っちゃったよ……………」

そう言って落胆したのは彩夏。

「悪いな、二人共」

自慢気にそう言ったのはユウセイ。

今彼等が何をしているのか、それはトランプで大富豪をしていた。余程暇なのか、大富豪はかなり盛り上がった。

「ユウセイこういうの得意だったよな」

「ババ抜きでも一番だったよね」

「運が良いって事だよな」

渚達がそう談笑していると、

「はい、コーヒー出来たよ」

信次郎がそう言ってコーヒーを三つ持って来る。

「お、じいさんサンキュー」

「ありがとう、お爺ちゃん」

渚達がそう言ってコーヒーを受け取り、飲もうとしたその時だった。何の前触れも無しに背景ロールが下りて来る。

「ん？」

渚達は立ち上がりその背景ロールを見る。

「何か、普通だな。コメントのしょうが無いつていうか………」
「雨降ってるくらい？」

ユウセイと彩夏がそう言うのも仕方無い。

背景ロールに描かれていたのは、普通の街並みにただただ雨が降り注いでいる光景だった。

だが渚だけがその背景ロールを思い詰めた表情で見詰めていた。そして静かに、更に悲しそうにこう呟いた。

「そういや、あの日も雨だったよな………」

果たしてこの言葉の意味とは………？

もう一人の世界の破壊者・ディライド。
自らの過去を振り返り、その瞳は何を見る？

渚達はとりあえず写真館から出た。

「あれ？雨降ってないよ？」

「本当だ。てっきりずっと雨が降ってる世界かと思ったけど」

彩夏とユウセイはそう言いながら辺りを見回す。

「……………」

だが渚は未だに思い詰めた表情をしている。

「ん？渚、どうしたんだよ」

「さっきから全然元氣無いけど……………」

二人にそう聞かれた渚は、

「えっ！？あ、いや、何でもない……………」

「「?」?」

渚の返答に二人は首を傾げるだけだった。
すると渚が気を取り直してこう言う。

「とりあえず、色々調べるしかないみたいだな」

渚はそう言うのとマシンデイルライダーに跨がり走り去った。

「あいつ、何か変だよな？」

「どうしたんだろ……………」

二人はただ渚の背中を見ているだけだった。

渚はマシンデイルライダーを何の当てもなくただ走らせていた。
だがそんな渚を監視する二つの人影があった。
その人影は執拗に渚をつけていた。

「ん？」

何かを感じ取った渚はマシンデイルライダーを停め振り返る。
その瞬間、二つの人影は姿を消した。

「気のせいか……………」

渚はそう言うのと再びマシンデイルライダーを走らせる。

暫くマシンデイルライダーを走らせていると、渚は花屋を見付ける。
渚は暫く花屋の前に佇むと、

「いい機会だよな。……………花でも買うか……………」

渚はそう言うと花屋へと入る。

「いらっしゃいませ！」

花屋の定員が明るく挨拶をする。

渚は軽くお辞儀をする。

定員は渚に、

「どのようなお花を？」

そう聞かれた渚は少し考えこう言う。

「適当に花束を………」

「かしこまりました！」

渚の曖昧な注文にも定員は笑顔で答え、花を一本一本丁寧に選ぶ。
そして、

「はい、この様な感じでよろしいでしょうか？」

定員は渚に花束を差し出しながら笑顔でそう言う。

渚は花束を受け取り、

「ありがとうございます」

軽く会釈をしてそう言い、会計を済まし花屋をあとにする。

「ありがとうございました！」

定員は笑顔でそう言った。渚はマシンディライダーに跨がり、

「一旦写真館に戻るか……………」

そう言うのと岬写真館へとマシンディライダーを走らせる。

— 岬写真館 —

渚は写真館に入ると信次郎を呼ぶ。

「じいさん」

「ん？ 渚君、どうしたんだい？」

渚は信次郎に花束を渡し、

「これ、どっかに置いていてくれ」

「はいよ」

信次郎は渚から花束を受け取り笑顔で返事する。

「じゃあまた行ってくる」「いってらっしゃい」

そう言って写真館をあとにする渚。

信次郎は笑顔で渚を見送ると、花束を持って写真館の奥へと入っていく。

渚はまた当てもなくマシンディライダーを走らせていた。
だがその時、何者かに襲撃を受ける。

「くっ！何だ！？」

渚はマシンディライダーから降りヘルメット外し辺りを見回す。
すると渚の前に二人の仮面ライダーが降り立つ。

「ザビーとラルク？」

そう、今渚の目の前に居るのはZECTのマスクドライダーシステムの一つ、蜂を模した戦士、仮面ライダーザビー・ライダーフォーム。そして四年の時を経て復活したアンデッドを封印するべく現れた新世代ライダーの一人、仮面ライダーラルク。

「一体俺に何の用だ？」

渚がそう聞くとザビーRFが、

「漸く見付けた………！」 「何？」

ザビーRFの言葉に渚は首を傾げる。
そしてラルクが、

「私達は貴方を許さない！」

ラルクがそう言うときザビーRFと共に渚に襲い掛かる。

「よっと！何だか知らねえが、やるなら相手になるぜ！」

渚は二人の攻撃を余裕で避けてそう言うのと、変身準備を完了させる。

「変身！」

《カメンライド…ディライド！》

渚はディライドに変身すると、ライドブッカー・ソードモードでザビーRFとラルクを切り裂く。

「はあ！」

「「うわああ！！」」

だがザビーRFとラルクは負けじと攻撃を仕掛ける。

だがディライドはいとも簡単に避けると、

「んじゃま、こいつで行くか」

ディライドはそう言うのとカードを装填する。

《カメンライド…セイリユウ！》

ディライドはディライド・聖龍にKRすると、更にもう一枚カードを装填する。

《アタックライド…ガードベント！》

D聖龍は左腕にライトシールドを装備し、右手でライドブッカー・ソードモードを構え一気に斬りかかる。D聖龍はザビーRFとラルクを幾度なく切り裂く。

たまに二人が反撃するも、ライトシールドで防御を行い二人を全く寄せ付けない。

「威勢良く来た割には大したことないな」

「この野郎………！」

「黙れ！」

ザビーRFは怒りを露にしてD聖龍に殴り掛かる。

ザビーRFの怒濤の攻撃にD聖龍は思わずライトシールドを落としてしまう。

そこへザビーRFが更に追い撃ちをかける。

「こいつの攻撃………」

D聖龍はザビーRFの攻撃に何か違和感を覚える。そしてその瞬間に出来た一瞬の隙についてラルクがラルクラウザーによる射撃を放つ。

「ぐっ！」

D聖龍は後退する。

「考えても仕方無い！」

D聖龍はそう言うカードを一枚装填する。

《カメンライド…フォルス！》

D聖龍はディライド・フォルスへとKRする。

そしてライドブッカード・ソードモードで再び反撃する。

だがその間もザビーRFの戦闘スタイルに何か違和感を覚える。
だがその違和感を振り切り一気に攻め込む。

ラルクがザビーRFを援護しようとしてラルクラウザーを放つがD
フォルスはジャンプして避け、そのままラルクの下へ行き、上空か
らライドブッカー・ソードモードで切り裂く。

「はあああ！」

「うわああ！」

Dフォルスは追撃するべくカードを一枚装填する。

《カメンライド…コウキ！》

Dフォルスはディライド・光鬼へとKRすると、更にもう一枚カ
ードを装填する。

《アタックライド…オンゲキボウ・レッコウ！》

D光鬼は音撃棒・烈光を装備してラルクに連打を浴びせる。

そこへザビーRFが攻撃しようとするがD光鬼は振り返ると同時に
烈光でザビーRFを吹き飛ばす。

そしてディライドに戻り、二人に止めを刺そうとする。

「終わりだ」

そう言った瞬間ザビーRFとラルクは突然こう言う。

「負ける訳にはいかない！父さんの為にも！」

「……………何！？」

「父さんの仇をとるまでは負けない！」

「お前等、一体何を……………?」

二人の言葉にディライドは混乱する。
そして頭をフル回転させる。

(父さん? 父さんってあの人の事か? そして家族、兄弟……………!?)

ディライドは遂に答えを見付けた。

「お前等、まさか……………!?!」

「漸く思い出したんですね、渚さん!」

「渚君、僕達は貴方を絶体に許さない!」

ディライドはザビーRFとラルクの変身者を咄く。

「結太、有紗!」

ディライドは二人の正体を知った途端後退りする。
そして震える声でこう聞く。

「お前等、どうやってライダーの力を……………?」

ディライドがそう聞くと、別の男が変わりに答えた。

「俺が上げたんだよ」

するとザビーRFの背後から白いスーツを来た金髪の男が現れる。

「貴様、黒神紅魔!」

黒神紅魔と呼ばれた男はザビーRFの肩に腕を乗せる。

「どうだい？俺の新しい部下は？」

紅魔は憎たらしい笑顔でそう言う。

ディライドは怒りを露にして、

「黙れ貴様！貴様と竜とフィリップだけは必ず俺が倒す！」

ディライドはそう怒鳴るが、

「そんな事言われてもな。戦うのは俺じゃないし。んじゃまお二人さん、止め宜しく」

紅魔はそう言うその後ろに下がる。

ディライドは紅魔を追おうとするがザビーRFとラルクが前に出るとディライドは立ち止まる。

「くっ！」

「終わりです！」

ラルクはそう言うラルクラウザーをゼロ距離で何発も乱射する。

「やあああ！」

「うわああ！」

ディライドはあまりのダメージに後ろに吹っ飛ぶ。
そしてそこへ、

「ライダーステイング！」 《ライダーステイング！》

ザビーRFの【ライダーステイング】がディライドの胸部に直撃してビル壁に叩き付けられ変身が解け、そのまま倒れる。

「あ……………ああ……………」

渚はそのまま意識を失い動かなくなる。

そこへ紅魔と変身を解いた結太と有紗が歩み寄る。

「さようなら、ディライド」

「……………」

紅魔は満面の笑みでそう言い、結太と有紗はただただ渚を見下ろしていたが、紅魔が歩き出し結太と有紗はその後ろについていった。

どこかの部屋のベッド、渚はそこで目を覚ます。

「うっ……………ここは……………」

渚は傷口を抑えながら体を起こす。
すると、

「起きた？渚君」

女性の声が聞こえてきた。渚はその女性を見ると目を見開く。

「香織さん……………!!」

「久しぶりの再会がこんな形になっちゃうなんてね……………」

香織の言葉に渚は顔を俯かせる。

香織はベッドの横にある椅子に座ると、渚にこう聞く。

「結太と有紗でしょ？」

「えっ？知ってたんですか？」

香織の言葉に渚は驚きを隠せなかった。

そしてこの話を聞く限り香織は結太と有紗の母親だという事がわかる。

「うん。私は止めたけど、あの子達まるで聞かなくて……………」

「そうですか……………」

渚は暫く黙ると、再び口を開く。

「まあ、当然の報いってやつですよ。実際、佳彦さんを殺したのは……………俺だからな……………」

「渚君……………」

渚の言葉に香織は悲しそうな表情をする。

そして渚はこう言った。

「俺が貴女達の前に現れなければ、あんな事にはならなかった……………」

「違うよ……………」

「えっ？」

渚の悲痛な言葉、だが香織は渚の言葉を否定してこう言う。

「渚君、聞いて？あの日の、あの人の本当の想いを……………」

香織の言う結太と有紗の父、佳彦の本当の想いとは？そして遂に語られる近藤 渚／仮面ライダーディライドの悲しき過去とは……………？

仮面ライダーディライド 過去編“後編” (前書き)

かなり長くなった……………。

仮面ライダーディライド 過去編“後編”

「渚君、聞いて？あの日の、あの人の本当の想いを……………」

香織はそう言うと言りは始める。

渚の過去、そして佳彦の本当の想いを……………。

大雨が降る夜の住宅街。

そこを渚は傷付いた体を引き摺りながら歩いていた。恐らくどこかの世界で負った傷だろう。

暫く歩くと渚は遂に力尽き、倒れてしまう。

「ぐっ！」

渚は立ち上がろうとするが傷が深く体に力が入らなかった。

「ここまでか……………」

渚が諦めかけたその時だった。

「大丈夫か！？」

突然聞こえてきた男性の声。

渚はその男性を見ようとしたが、そのまま意識を失ってしまった。

「ん？」

渚はどこかの部屋のベッドで目を覚ます。

「ここは……………」

渚は傷付いた体を起こしながら周りを見る。

「あ、気がついた？」

聞こえてくる女性の声。

渚は声のする方を見る。

「あの……………」

渚は状況を掴めず困惑する。

女性は別の部屋に向けてこう言う。

「佳彦、起きたわよ」

「そうか！」

すると別の部屋から一人の男性が部屋に入ってくる。

「お、気が付いたか」

男性はベッドの横にある椅子に座りながらそう言う。

「貴方が、俺を……………」

渚は男性にそう聞く。

「ああ。びっくりしたよ、血だらけで倒れてるんだからな。ほんとくわけにもいかないしな」

男性は笑顔でそう言う。

「ありがとうございます………」

渚が感謝の気持ちを述べると男性は、

「良いつて良いつて！で、君名前は？」

「渚、近藤渚………」

「渚か！俺は梶原佳彦だ。こっちは妻の香織だ」

「よろしくね、渚君」

「はい」

渚が軽く会釈すると佳彦は立ち上がり、

「じゃあ、ゆっくりしててくれ」

そう言って香織と共に部屋をあとにした。

「ふう………」

渚はため息を吐き、再び横になる。

余程疲労がたまっているのか、もう一眠りをしようと思い目を閉じようとした瞬間、

「ねえねえ」

「ん？」

渚の耳元に誰かが声をかけ、渚は目を開け横を見る。そこには一人の少年が居た。

「どうした？」

渚は優しくそう言う。

少年は渚に顔を近付け、

「お兄ちゃん、名前は？」

そう聞かれた渚は体を起こしながら、

「近藤渚だ」

「僕は梶原結太！」

結太は自分の名前を言うと、急に目をキラキラと輝かせ、

「渚君ってさ、強いの！？」

「えっ？」

渚は結太の問いに戸惑った。

「どうしてそう思うんだ？」

渚は優しくそう聞く。

結太はある方向を指差しながら、

「渚君、仮面ライダーだね！あのベルトそうだね！？」

結太の指差した方向には机に置かれたディライドライバーとライドブッカードがあった。

「ああ、そうだな」

渚は隠す必要は無いと思い素直に答えた。
すると結太は更に目をキラキラ輝かせ、

「僕、強くなりたいんだ！だから僕に戦い方を教えてよ！」

結太は渚の手を掴みそう言う。

「え、あ、いや……………」

渚は結太の言葉にただただ困惑するしかなかった。
渚が結太と話していると、

「ちょっと結太！困らしちゃ駄目でしょ！」

「げっ！姉ちゃん！」

結太は入り口の方を見てそう言う。

入り口に居たのは結太より歳上に見える少女だった。少女は渚に歩み寄り、

「弟がすいません。私は梶原有紗です」

「大丈夫だ。俺は近藤渚だ、よろしくな」

そんなこんなで渚が梶原姉弟と話していると、リビングの方から、

「ご飯出来たわよ！」

香織の声が聞こえてくる。結太は渚の手を掴み、

「ねえねえ、渚君も一緒に食べようよ！」

「えっ、でも………」

結太の言葉に渚は少し戸惑う。
すると有紗が、

「是非食べて下さい。母さんの料理最高ですよ？」

有紗はそう言うのと渚の手を掴み、結太と共に渚をリビングへと案内する。

リビングに到着すると、料理はちゃっかり渚の分も用意されていた。

「俺の分もあるのか………」

渚がそう呟くと香織が、

「あ、丁度良かった！渚君も呼ぼうと思ってたのよ！」

「あ、いや、でも………」

渚はこんなに持て成してくれる梶原家に完全に圧倒されていた。
渚が戸惑っていると結太と有紗が渚の手を引き、椅子に座らせ、自分達も椅子に座る。

四人は手を合わせて、

「「「いただきます」」「」」

声を合わせてそう言う。

渚も少し遅れ、戸惑いながら、

「い、いただきます………」

そう言って料理を口に運ぶ。

そして一口食べたその時、

「っ！う、美味い………」

渚は目を見開きそう言うのと、次々と料理を口に運ぶ。それを見た佳彦と香織は穏やかな笑顔を見せる。
すると結太が、

「渚君さあ！一緒に住もうよ！ねえ父さん、母さん、良いでしょ！？」

佳彦と香織にそう言う。

渚は慌てて、

「えっ、いや、幾らなんでもそれは………」

そう言って断ろうとしたが、佳彦と香織が、

「良いんじゃないか？それに渚、出ていくにしてもどこか行く所はあるのか？」「それにまだ傷も治ってないのよ？」

それを言われた渚はかなり遠慮がちに、

「じゃ、じゃあ、ちよつとの間だけ………」

渋々了承した。

渚としてはあまり一つの世界に留まるのを好まないが、この家族には助けられた恩もあるため、暫く留まる事を決めた。

渚の返事を聞いた結太は、

「やったあ！ねえねえ渚君、戦い方を教えてよ！」

「ああ、わかった」

そこから、渚は梶原家に居候する事になった。

それからは渚にとって本当に楽しい日々となっていた。

結太に戦い方を教えたり、時には有紗に勉強を教え、佳彦の仕事を手伝ったり、香織に料理を習ったり。

家族も居らず、記憶も無い渚にとっては幸せな日常だった。

だが、この時渚は知るよしもなかった。

自分がこの暖かい家族を壊してしまう事を……。

渚が梶原家に居候を初めてから一週間がたったある日。
その日はあの背景ロールの様に大雨が降っていた。

「父さん帰って来ないな」

結太は窓から外を見ながらそう言う。

「いつもならもう帰ってる時間なのに……。それに今日結婚記念日だし……………」

有紗は時計を見ながらそう言う。

有紗の言う通り、今日は佳彦と香織の結婚記念日で、机には豪華な料理が並んでいる。

すると渚は立ち上がり、

「俺、探しに行ってきます」

渚がそう言うのと結太と有紗も、

「僕達も行くよ！行こう姉ちゃん！」

「うん！」

結太と有紗はそう言うのと部屋を出ていく。

渚は香織に、

「香織さんは待ってて下さい。もしかしたら佳彦さん帰って来るかもしれないから」

「わかった。渚君、よろしくね」

香織は不安そうな顔でそう言う。

渚は微笑みながら頷き、部屋を出ていく。

渚が家を出ると、結太と有紗が傘をさして待っていた。

渚は傘を広げ、

「じゃあ結太と有紗は向こうを頼む。二人共、絶対に離れるなよ？」

「うん!!」

そう言うとき渚は結太と有紗とは別方向へ走り出す。
暫く歩いていると、曲がり角に到着する。
すると曲がり角の方から苦しむ様な声が聞こえる。

「うっ! うう……」

「っ! まさか!」

渚は嫌な予感がし、急いで角を曲がる。

渚の嫌な予感は見事に的中してしまった。

角を曲がった先には、傷だらけの佳彦が居た。

「佳彦さん!」

渚は傘を放り投げ佳彦を起こす。

「渚……!!」

佳彦は弱々しい声でそう言う。

「一体何があったんですか!？」

渚がそう聞いた瞬間、別の男の声が出た。
しかし一人ではなく二人だった。

「こんな所に居たのか」

「やっと見付けたよ、実験台」

渚は声のする方を見る。

だが渚は自分の目を疑った。
何故ならその二人は、

「竜！フィリップ！」

そう、渚の前に現れたのは【仮面ライダーW】の世界に居る筈の仮面ライダーアクセルこと照井竜と、Wの頭脳と呼ばれる仮面ライダーWことフィリップ、またの名を園崎来人。

「何でお前等が！？」

渚は竜とフィリップにそう言うが、

「何だ貴様、誰の事を言っている？」

「えっ？」

渚は竜の返答に首を傾げる。

するとフィリップが、

「照井竜、彼は恐らくディライドだ。そして彼は僕達とは別の仮面ライダーWの事を言っているんだろう」「なるほどな、そういう事か」

「別の、W………？」

渚はフィリップの言葉に戸惑いを隠せない。

だが竜はそんな渚を無視して佳彦を連れて行こうとする。

「とりあえずこいつはもらっていく」

「させるか！」

渚はそう言って竜に掴みかかり、こう言う。

「何故佳彦さんなんだ！」「そいつは不幸な事に俺達の実験を発見し、最初の実験台を逃がした。だから変わりにこいつを実験台にする」

それを聞いた渚は怒り露にして、

「ふざけるな！そんな事させない！」

そう言って竜を殴ろうとするが、防がれ逆に殴られてしまう。

「ぐあっ！」

渚が地面に転がった隙にフィリップは一本のガイアメモリを取り出す。

《キメラ！》

「さあ、実験開始だ」

「やめろ！」

そう言って佳彦にコネクタを打ち込みガイアメモリを挿入する。

「ぐああああ！」

その瞬間佳彦は様々な動物が一つになったドーパント・キメラドーパントへと変貌する。

「ガアアアア！」

キメラは天に雄叫びをあげる。
それを見た竜とフィリップは、

「中々の出来だな」

「とりあえずは実験成功だね」

そう言うのと次元の壁を出現させ、どこかの世界に移動した。

「なっ！待て！」

渚が二人を追い掛けようとした瞬間、キメラが渚に襲い掛かる。

「ガア！」

「ぐっ！仕方ない！」

渚はそう言うのとディライドライバーを取り出し変身準備を完了させる。

「変身！」

《カメンライド…ディライド！》

渚はディープイエローを基調色にした次元戦士、もう一人の世界の破壊者・仮面ライダーディライドに変身する。

ディライドはキメラに攻撃を仕掛けようとするが、変身者が佳彦とというのが頭をよぎり攻撃出来ず、ただ抑える事しか出来なかった。

「佳彦さん！やめてくれ！」

ディライドは必死にキメラを抑えるが、キメラは一向に止まる気配を見せない。だがディライドはそれでもキメラを止めようとする。

すると突然カメラが苦しみ始める。

「ぐうううう！」

「佳彦さん！？」

するとカメラからガイアメモリが排出され、佳彦の姿に戻る。

「うう………」

「佳彦さん！」

ディライドは佳彦に駆け寄り起こす。

だがその時、

「だからコネクタなんか使わなかつたのにいゝ」

ディライドは声のする方を向くとそこにいたのは、白いスーツを着た金髪の男・黒神紅魔が居た。

紅魔はガイアメモリを拾いながら、

「直接挿さなきゃ意味ねえじゃん」

ディライドは立ち上がり、

「何者だ！？」

「あつ、ディライドじゃん。俺黒神紅魔、よろしくね」

紅魔は軽い口調でそう言う。

「てかさ、そこどいてくんない？それ使うんだけど」

紅魔がそう言うとき、デイルイドは、

「そう言われてどく奴がいるか？」

デイルイドがそう言うとき、紅魔はニヤリと笑い、

「仕方ない、力付くまで退かすしかないか………」

紅魔はそう言うとき、黒のガイアメモリを取り出し、ガイアウィスパーを鳴らす。

《サタン！》

紅魔は悪魔の記憶を内包したガイアメモリを自分の左手に挿入する。

「俺も直挿し派なんだよね」

紅魔は黒と赤を基調色にした悪魔を模したドーパント、サタンドーパントへと変貌する。

サタンは右手に漆黒の炎を灯し、デイルイドに向けて放つ。

「それっ！」

「ぐああああ！」

デイルイドは吹っ飛び変身が解ける。

「くっ！」

その隙に紅魔は佳彦に近寄り、佳彦の左手にガイアメモリを直で挿入しようとする。

それを見た渚は、

「なっ！やめろおお！」

そう言った時にはもう遅く、佳彦はキメラドーパントへと変貌してしまう。

それを確認したサタンは紅魔にもどり、

「ひょえー、すげえ迫力。あ、デイルイド、後始末よろしくー」

紅魔はそう言うと言元の壁を出現させ、どこかの世界に移動した。

「くそっ！」

渚は悪態をつきながら立ち上がる。

するとそれと同時にキメラが渚に襲い掛かる。

「ガアアアア！」

「くっ！」

渚は間一髪で避ける。

「一体どうすれば……………」

渚は頭をフル回転させ考える。

（相手はドーパント。そして変身しているのは佳彦さん。ドーパント……………ん？ドーパント！？そうか！）

渚は答えを見付け出し、意を決した表情で変身準備を完了させる。

「変身！」

《カメンライド…デイルライド！》

渚はデイルライドに変身すると走り出し、キメラに攻撃する。

先程とは違いデイルライドの動きに迷いは無かった。

そしてある程度攻撃が決まると、キメラと間合いを取り、カードを一枚装填する。

「変身」

《カメンライド…ダブル！》

デイルライドは右半身が緑、左半身が黒の二人で一人の仮面ライダー、仮面ライダーW・サイクロンジョーカーにKRする。

「行くぞ！」

そう、渚の考えはWにKRしてマキシマムドライブにより、メモリブレイクを行う事だった。

DWCJは華麗な動きでキメラに次々とキックを決める。そして更にカードを一枚装填する。

《フォームライド…ダブル！ヒートメタル！》

DWCJは右半身が赤、左半身が銀のW・ヒートメタルにFRする。そして背中に背負っている棍棒・メタルシャフトを装備するとカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ダ・ダ・ダ・ダブル！》

その瞬間メタルシャフトが炎を纏い、DWHMはジャンプしてキメラに【メタルブランディング】を放つ。

「はああああ！」

「ぐああああ！」

【メタルブランディング】を受けたキメラは佳彦に戻り、倒れる。DWHMは変身を解き佳彦に駆け寄る。だが渚はある事に気付いた。

「メモリが、無い？」

そう、何処を捜してもメモリが無かった。

「まさか！」

渚は佳彦を見る。

佳彦は左手を抑えながら苦しんでいた。

「メモリブレイク出来ていない？」

渚がそう言った瞬間佳彦が、

「ぐああああ！」

突然声をあげて苦しみ出す。

「佳彦さん!？」

渚は佳彦に駆け寄るが、佳彦はメモリにより暴走して渚を突き飛ば

す。

「うあ！」

すると佳彦が苦しみながらこう言った。

「渚………！俺を、殺せ！」

「えっ！？」

渚は佳彦の突然の要求に戸惑いを隠せない。
だが佳彦は、

「いいからっ！早く！」

佳彦がそう促すと、渚はライドブッカー・ソードモードを構え、振りかぶる。

「くっ！」

渚は刃を振り下ろし佳彦を切り裂こうとする。
だがその時、

“ 父さん！”

“ 佳彦！”

佳彦を呼ぶ香織達の顔と声が頭をよぎった。
そして渚の刃は佳彦の首の前で止まる。

「くっ！」

「渚………！？」

渚の手が震える。

「はあっ！はあっ！」

渚の荒い息が彼の迷いを表す。

それほどまでに佳彦を殺す事に戸惑いを感じる。
だがその間にも佳彦は苦しみ続ける。

「渚！早く！」

「俺には、出来ない……………」

渚はそう言ってライドブッカー・ソードモードを離そうとする。
だがその時、

「い、いいから！俺が俺でなくなる前に！俺が家族を手にかける前に！」

「っ！」

渚は佳彦の言葉を聞いた瞬間、離しかけたライドブッカー・ソードモードを再び強く握り大きく振りかぶる。

「あああああ！」

渚は声を張り上げ迷いを断ち切りライドブッカー・ソードモードを振り下ろす。振り下ろされたライドブッカー・ソードモードは、佳彦の体を引き裂き、彼の命を奪い、

「あ、ありが、とう……………渚……………」

彼を救った。

渚はただその場に立ち竦んでいた。

その表情はとも言葉で言い表せるものじゃなかった。

するとその時、渚にとって最も会いたくなかった二人の声が聞こえる。

「渚君！」

「渚さん！」

結太と有紗だった。二人は渚に駆け寄ると自分達の目を疑った。

それもその筈、渚の足下には自分達の父親の亡骸があるのだから。

「「父さん!!」」

二人は佳彦を起こそうとする。

二人が幾ら声を掛けようとも佳彦は起きない。

「そんな……………」

「なんで……………」

有紗は目から大粒の涙を流す。

結太は立ち上がり渚の方を見る。

「渚君が殺したの？」

結太の質問に渚は答えない、いや、答えても、事情を説明しても意味が無いと悟った。

何を言っても自分が佳彦を殺したのは事実なのだから。

黙っている渚を見て結太は答えを見付け出し、渚に掴みかかりこう言う。

「何だよ！何でなんだよ！答えろよ！渚君！」
「……………」

渚はどう返したらいいか分からずただ俯くだけだった。

「何でなんだよお……………、渚君仮面ライダーなんだろう？仮面ライダーは…、仮面ライダーは人を守るんじゃないのかよ！仮面ライダーは人殺しなのか！？何とか言えよ！渚君！！」

渚は何も答えず結太の手を振りほどき何処かへ歩いていった。

有紗はただ泣き叫び、結太はその場に崩れ落ち涙を流すだけだった。

その頃香織は家で家族の帰りを待っていた。
すると、

『香織……………』
「佳彦！？」

何と、香織の目の前に死んだ筈の佳彦が居た。

恐らく、死んでも尚家族を想い続ける佳彦の魂が幻となって現れたのだろう。

香織は佳彦に、

「佳彦、まさか……………！」

香織の質問に佳彦は無言で頷き、

『香織、ごめんな、結婚記念日だっていうのに……………』
「ううん……………」

香織は涙を流しながら首を横に振る。
佳彦は微笑み、

『香織、頼みがある』
「……………何？」

『結太と有紗を頼むそして……………』

佳彦は少し間を開け、

『渚を責めないでやってくれ……………』
「えっ？」

『渚は俺を、俺達家族を救ってくれた』
「……………」

佳彦の言葉に香織は困惑するばかりだった。
すると、佳彦の体が光だす。

『ごめん、もう行かなきゃ……………』
「えっ!？」

香織は突然の事に慌てふためく。

『じゃあな、香織。……………愛してる』

佳彦はそう言い残すと、跡形もなく消えた。

香織は泣き崩れ、こう呟いた。

「……………愛してる」

渚は雨の振る街を傘もささずふらふらと歩いていた。

「何が輝く光の戦士だ……………。一つの家族も救えないくせに……………。それだったら俺は、通りすがりでいい……………」

渚はそう静かに呟くと、夜の街に消えていった……………。

「これが、一年前の佳彦の本当の想い……………」

渚は佳彦の想いを聞き、瞳を閉じる。

そしてゆっくり瞳を開け、ベッドから下りる。

「どこに行くの？」

香織がそう聞くと、

「罰は受けないとな」

「えっ!?!」

渚はそう言うと部屋をあとにした。

渚が家を出るとそこには、

「やっぱり母さんに助けられてたね、渚君」

「でももうここまですよ」

ザビーRFとラルクが待ち伏せていた。

「来いよ」

渚は両腕を広げそう言う。

「なめるな！」

「行くよ、結太！」

ザビーRFとラルクは渚に向かって走り出し、ザビーRFは渚に右ストレートを放つ。

単純な攻撃は普通に避けられると思ったザビーRFだったが、

「ぐっ！」

ザビーRFの右ストレートは渚の顔面に直撃する。

「えっ？」

ザビーRFとラルクは困惑するも、攻撃を続ける。

だが渚は攻撃を一つも避ける事なく攻撃を受け続ける。

「何でだ！何で避けない！」

ザビーRFは渚に問うが、渚は答えずただただ殴られる一方だった。
すると、

「やめて！」

そう言って香織が家から出てくる。

「母さん！？」

香織はザビーRFとラルクにこう言う。

「あの日のお父さんの気持ちを知ってるでしょ！？」

香織がそう言った瞬間、ラルクは我に帰ったかの様に攻撃をやめる。
だがザビーRFは、

「う、うるさい！そんなの、そんなの！」

そう言って攻撃の手を緩めなかった。

「くそっ！くそっ！くそお！」

ザビーRFは最早やけくそになりながら渚を殴り続けた。
すると、

「もう、やめて……………、もうやめて！」

そう言ってザビーRFを抑えたのは、ラルクだった。

「姉ちゃん！？何でだよ！」

「もういいよ！結太だって！結太だって本当は！」

ラルクがそう言った瞬間ザビーRFは、

「うるさい！」

そう言ってラルクを突き飛ばし、ザビーゼクターのボタンを押す。

《ライダーステイング！》「うわあああ！」

ザビーRFは左腕を振り上げ渚に【ライダーステイング】を放つ。
渚は目を瞑る。

だがいつまでたってもザビーRFの拳が自分を直撃しなかった。
渚がゆっくり目を開けると、

「ぐっ！くううう………」

ザビーRFの拳が自分の目の前で止まっていた。

それを見たラルクはラルクバツクルを外し変身を解き、ラルクバツクルを投げ捨てる。

ザビーRFもザビーゼクターを外し変身を解き、ライダーブレスを投げ捨てた。

「結太………」

結太は大粒の涙を流し、

「僕だって、僕だってわかってるよ……、渚君がそんな事するわけないって！でも、父さんを失なった悲しみをどこにぶつけていいかわからなかった！」

結太がそう言うと、

「結太、ごめんな………」

渚はそう言いながら結太の頭に手を置く。

香織と有紗は渚と結太に駆け寄り、

「渚さん、ごめんなさい………」

有紗は渚に頭を下げるが、

「いいって」

渚はそう言って有紗の肩を掴み有紗の頭を上げる。

「俺の方こそ、ごめんな。誤解を解かなくて、いや、解こうともしなくて」

渚がそう言うと香織達は笑顔になる。
だがその時、

「ああゝあ、つまんねえ」

渚は声のする方に振り向く。
そこに居たのは、

「黒神紅魔！」

佳彦殺害の黒幕とも言える男・黒神紅魔。

「楽しんでディライドを消せると思ったのにな」

紅魔はめんどくさそうに言う。

「仕方ない、俺が直々に消すか。ついでにその家族も」

紅魔はガイアメモリを取り出す。

《サタン！》

紅魔はサタンドーパントへと変貌して、右手に漆黒の炎を宿す。

「やばい！」

渚がそう言った瞬間サタンは漆黒の炎を放つ。

渚は瞬時にディライドに変身して香織達の前に立ち、サタンの攻撃を諸に受ける。

《カメンライド…ディライド！》

「ぐああああ！」

ディライドは変身が解け、渚に戻ってしまう。

「「渚君！！」」

「渚さん！」

香織達は渚に駆け寄る。
するとサタンが、

「お前等の親父には役立ってもらったよ」
「な、何！？ どういう、事だ……………！！？」

渚は傷だらけの体に鞭を打ちサタンにそう聞く。

「そいつ等の親父のおかげで最高の戦士が誕生したんだよ。ま、半分がデイルイドにやられちゃったけどね」

サタンの言葉を聞いた瞬間渚は、

「まさか、あのダークライダーは！」
「そう、ガイアメモリにより進化したショックカー戦闘員だよ」

サタンは少し間を開け、

「でもメモリブレイクは出来ずに、負けるとそのまま死んじゃう。
あっはっはっは！ マジウケるんですけど！」

サタンの言葉を聞いた瞬間、渚はゆっくり立ち上がり、サタンを睨み付け、

「腐ってるぜ、お前……………！！」

ドスの利いた低い声でそう言う。
だがサタンは、

「お前に言われたかねえよ！この人殺しが！」

「なんだと！」

サタンがそう言うのと、結太は怒りを露にするが渚がそれを止める。

「ああ、確かにお前の言う通り、俺は人殺しだ。そして俺はその罪を償おうとしてきた。だが、この世界に来て、俺の償いが間違いだった事に気付いた。俺は今までの旅路で何人もの人間を犠牲にしてきた」

渚は少し間を開け続ける。

「そして罪を償うということは、罰を受ける事でも、法で裁かれる事でもない！その人間の分まで生きる事だ！俺は自分のせいで犠牲になった人間の分まで生きなきゃならない！そしてそれをお前に邪魔されるわけにはいかない！」

渚がそう言うのとサタンはこう聞く。

「偉そうに！貴様何者だ！？」

渚はそう聞かれると、変身準備を完了させこう言う。

「俺は、通りすがりの仮面ライダー、輝く光の戦士だ！頭に叩き込んで！変身！」

《カメンライド…！デイルライド！》

渚がデイルライドに変身すると同時に、サタンはデイルライドに襲いかかる。

「くそがあ！」

ディライドはサタンの攻撃を避けると、サタンに次々と攻撃をヒットさせていく。

「はあ！はあ！」

「ぐう！な、何故だ！どこからこんな力が！」

サタンの言葉を見殺してディライドは攻撃の手を休めるどころか、更に勢いを増していく。

「馬鹿な！俺は、俺は最強のドーパントだぞ！？」

サタンがそう言うのとディライドは右手をディープイエローに輝かせ、

「お前が何者だろうが！俺には関係ない！はあああ！」

そう言うのと【ディメンションインパクト】を放つ。

「ぐおおおお！」

サタンは大きく吹っ飛ぶ。すると、

「ふざけるなよ……、仮面ライダーごときが！」

サタンはそう言うのと禍々しい闇を放出する。

「なに！？」

ディライドが困惑している隙にサタンは一気に間合いを詰め、ディ

ライドの首を掴み持ち上げる。

「ぐああ！」

「消えろ！デイルイドオオオオ！」

正に絶体絶命。

だがデイルイドは、仮面ライダーは決して諦めなかった。

「まだだ！」

そう言った瞬間デイルイドのデイメンションヴィジョンが輝くと、デイルイドから虹色の光・フィブリルが放出される。

「ぐっ！なんだこれは！」

サタンはフィブリルの光に怯み、デイルイドを離す。

「俺は、負けられない！はあああ！」

デイルイドはそう言うのと天に向かって雄叫びを上げる。
そしてフィブリルの輝きはサタンにダメージを与える。

「ぐおおおお！」

これがフィブリルにより発動する極光術の一つ、【極光壁】である。
そしてデイルイドはライドブッカードソードモードを構える。

するとライドブッカードソードモードが虹色に輝く。そしてそれで
敵を幾度となく切り裂く【極光剣】を発動する。

「はあああ！」

「ぐああああ！」

【極光剣】を受けたサタンは大きく吹っ飛ぶ。

そしてライドブッカードからカードを一枚取り出す。

そのカードはFARのカードのディライドのクレストが銅色で描かれたカードだった。

そしてそれを装填する。

《ライド…ディライド！》

Rが発動すると、ディライドをディープイエローのオーラが包む。そして立て続けにカードを装填する。

《ファイナルライド…デイ・デイ・デイ・ディライド！》

するとディライドがディープイエローに輝き出す。

そして飛び上がり、【スーパードイメンションスマッシュ】を放つ。

「はああああああ！」

「ぐああああ！」

紅魔からガイアメモリが排出され、ガイアメモリはそのまま粉々に砕け散る。

「俺のガイアメモリが……………」

ディライドは変身を解く。すると紅魔の体に異変が起きる。

「ぐっ！ま、まさか！」

そして、

「そんな馬鹿な！NEVERの、この俺が！ぐっ！ぐああああ！」

紅魔は跡形もなく消え去った。

「終わった……………」

渚が安堵の表情を見せたその時だった。

「ごくろうさん、ディライド」

「何！？」

そこには、ユウキ達の前にも現れた灰色のスーツを来た青年が現れた。

「なんだ、お前！」

渚はそう聞くが、青年はそれを無視して紅魔の居た場所からあるものを拾う。

「なんだ、そのカードは！？」

青年が拾ったカードには灰色の仮面ライダーが描かれたライダーカードだった。

「これがあれば、俺の野望は果たされる！」

「どういう事だ！？」

渚がそう聞くと青年はライダーカードと電王の世界で回収したデン

オウベルトを取り出しこう言う。

「この二つがあれば、俺は全ての世界を、時間を手にする事が出来る!？」

「何!？」

青年はニヤリと笑い、

「俺、今すげえ嬉しいって顔してると思うんだけど、どうかな？」
「知るか!」

すると青年の後ろに灰色のデンライナーが現れる。

「まあいいや。じゃあね」

青年はそう言うのと灰色のデンライナーに乗りどこかへとびさった。

「なっ! 待て!」

渚が青年を追い掛け様とすると、渚の前に一台のバイクが停まる。
バイクに跨がった青年はヘルメットを取りバイクから下りる。

「渚!」

「ユウキ!？」

そう、ユウキだった。

「久しぶりだな、渚」

「お前、何でここに？」

渚はそう聞くがユウキは、

「今は再会を喜んでいる暇はない。あいつを止めないと。手伝ってくれるな？」

ユウキがそう聞くと渚はふっと笑い、

「当たり前だ！行くぞ！」 「ああ！」

果たしてあの青年の目的とは？

そして仮面ライダーは青年の野望を阻止出来るのだろうか………？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3287y/>

仮面ライダー×仮面ライダー デュライド&幽汽 MOVIE大戦PAST

2011年12月27日01時47分発行